

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.109

京町家通信 第109号 2016年11月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページ <http://www.kyomachiya.net/>

巻頭言 ◎ 東京相談会「京町家に暮らす」開催に向けて

2013年2月「住みたい知りたい京町家」と題して、初めて東京で不動産相談会を開催しました。東京から京町家を探しに来られる方が増えてきたので、情報センターが中心となり、物件を東京で紹介しようということになったのです。不動産情報を東京で提供するだけではなく、京町家の再生にはどのような意味があるのか、きちんとした改修とはどういうものなのか、セミナーを開催し、きちんとした構造改修の事例をみなさんにしっかりと伝えようと企画しました。再生研はもとより、作事組の大工さんも総出で東京へ赴きました。

このとき来られたのが横浜在住の友田健一さんです。伝統構法による改修にとても興味を持たれ、その後、京都にある実家を再生することになりました。今では、折々にご夫婦で来られて長期滞在し、町家の暮らしを満喫されています。友の会の行事にもほぼかかさず参加、場合によってはお手伝いにも来られます。いきさつを友田さんに伺いました。

◎ 東京相談会に参加したきっかけ

京都在住の息子が実家の補修を検討する為にいろんな所を回っていました。その一つである京都市景観・まちづくりセンターから、冬に東京でセミナーがあることを教えていただいたのです。主催団体の京町家再生研究会や作事組のことは全く初耳でした。非常に関心のある町家の補修についてわざわざ東京まで出張して説明されるというので、これを逃すことはできないと参加を決めました。

◎ 改修の方法を詳しく聞く

東京会場のセミナーで詳しく改修の方法を講演された時に、再生研、作事組のみなさんの並々ならぬ町家再生への情熱を感じました。セミナー後の相談会で詳細を問い合わせた時の対応者が、講演をされた木下龍一さんと大工の大下尚平さんでした。いろいろと伺ううちに直感で「この方たちなら信頼して仕事をお任せできる」と思いました。後日、木下さんを頼って京都に戻って詳しく打合せを始めました。京都の現地をつぶさに調査していただき仕事を依頼することにしました。もっとも他の業者さんを探そうにもその方法が分からなかつた、というのが正直なところです。

◎ 本格的な改修へ、気持ちを切り替える

はじめは予算的にもゆとりがないので、傷んでいる所を限定的に補修していただくつもりでした。何回か話を詰めていくうちに大屋根の棟木に記された建築時の銘からこの町家が

104年も経っていることが判明、「本格的に直せばあと100年はもつ」と木下さんたちに改修を勧められました。「ひ孫の代までこの家を残そう」と気持ちを切り替え、持っている原資に町家ファンドの補助を加えることで何とか資金の面は解決できるだろう、と清水の舞台から飛び降り（？）ました。

◎ 町家の暮らしを楽しむ

一年の半分弱は京都暮らしです。通り庭の高い土壁と柱、お座敷の聚楽壁など蘇った数々の美しく味わい深いものの下での生活を楽しんでいます。京都育ちの私にとっては50年ぶりの里帰りで学生時代の仲間との交流が増えて心身のリフレッシュに役立っています。九州出身の妻は多くの親戚・友人たちに町家住まいを味わっていただき喜ばれています。町家の底冷えは相変わらずですが、通り庭の台所の床を上げたことで厳しさは非常に和らいでいます。

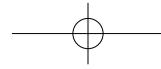
横浜との往復ですが、決して大変とは思っていません。年に数回旅行に出かけるのと同じ感覚です。横浜が本宅、京都が別荘の感覚で往き来しています。

2014年9月27日に開催された2回目の東京相談会では、松井薰・情報センター代表による講演「京町家の魅力と活用法」とともに、友田さんが講演者として登板、改修に関するお話をしていただきました。2015年11月21日には小島富佐江・再生研理事長が京町家の魅力と暮らしを伝える講演をおこなっています。講演の後、作事組の設計士や大工と一緒に情報センター登録業者が相談をうける仕組みは変わっていません。京町家を伝統構法で健全におし、美しく暮らすことを事例に基づいて丁寧に説明するようにこころがけています。昨年は不動産投資の立場から参加された方があまりにも多かったので、今回は住みたい方々に焦点を絞りました。

最後に、京都に戻ろうかな、京都に住みたいな、京町家に住めるかな、と思っているみなさんに友田さんからのメッセージです。

「思い立ったが吉日」、まず専門家（たとえば作事組）に相談することです。そこからスタートです。

<丹羽 結花（京町家再生研究会事務局）>



論考 ◎全国町並みゼミ 大内・前沢大会に参加して

2016年9月9日から11日にかけて開催された全国町並みゼミ。人生初の南会津滞在、再生研関係者は私だけ、台風の影響などなど、心細いことこの上なかったが、緑の山々に囲まれ、清涼な水が流れるとても気持ちのよいところで、市街地から農村集落まで、さまざまな地域で多くの方々に出会うことができた。

城下町会津若松は、全国町並み保存連盟の会長を務めた五十嵐氏ゆかりの地である。今回は第9回会津若松市・下郷町大内宿大会以来30年ぶりの開催でもあり、町並み保存にたずさわる人々に大きな影響を与えてきた五十嵐イズムの検証とあわせて、町並みゼミのありかたそのものを考える機会にもなった。

大内宿再生の牽引者、吉村徳男さんは、全体会の対談や分科会などを通じて「生活の光り輝いているところを観てもらうのが観光」と語った。集落の特徴であるかやぶき屋根を維持するべく、45才で退職して屋根葺き職人に弟子入りし、技術を身につけ、若い人たちと一緒に経験を積み、集落内の屋根を地域住民の手で葺き替えている。今回の大会にあわせて春の作業を秋に延ばし、作業風景を見せてくださった。本職は別といいながら自分たちの手で維持しているというみなさんの気概が感じられる。ほんものの技術を持っているからこそ、吉村さんの言葉にはぶれるところがないのだろう。神社「高倉さま」を中心とした歳時記など、老若男女、それぞれの世代ができるることをやる、というコミュニティの意識も明確である。最終日にエクスカーションで訪れた前沢集落でも日々の落ち着いた生活を感じられた。水路の流れ、畑の様子など特別なことではないけれども、整っている。技術と生活習慣、その根元にある精神がしっかりと各自に息づいているからこそ、暮らしと町並みが継続されていることが窺える。

国をはじめ行政は、地方創生の絡みもあり、歴史や文化財をいかした産業、とりわけ観光政策を進めている。町並み保存関連の活動には追い風ともいえる。だが、保存による観光を旗頭にした活動は転換期を迎えていた。今回の大会で課題となつたことを以下3点にまとめておこう。

第一の論点は「観光と生活」であり、第2分科会「人が住み続けられるまち」というテーマにも表れている。重伝建地区はもはや珍しいものではないし、保存修景が伝家の宝刀でもない。観光のための景観整備、町並み保存そのものが目標ではなく、地域の生活や生業を維持することが強調されていた。第2分科会での福井県東谷地区の二枚田さんの取り組みや第4分科会「農村集落の生き残り方」など、生業といかに関わるかが今後は重要な論点となるだろう。

第二は「売らない、貸さない、壊さない」の三原則の守り方である。東京あるいは全国規模、または外国などの外部資本に対する姿勢としては当てはまるかもしれないが、相続ではなくとも本当に大事にする他者、価値観や意義を

共有できる人々には積極的に住み継いでもらうことが必要だ。（古い言い方だが）Iターンや移住受け入れなど新しい世代が住み継ぐ仕組みを考える上では「住まいとして」の集落の魅力が重要となる。

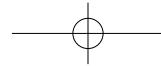
第三は「失敗例を語る場にしよう、本当のところはこうやねんという話をする場をもうけよう」という呼びかけがなされたことである。国や行政の仕組み、支援、制度をうまくつかって成功した事例を参考するだけではなく、その裏にある実態を知り、そのギャップにこそ問題が潜んでいることを認識する必要がある。

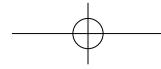
よく「京都は特別だから」と言われるが、どの地域もそれぞれ特別であり、地域固有の問題を抱えている。住み続けるためには、地域に特徴的な住まい、それを引き継いでいく行事、メンテナンスの技術が必要であることは、吉村さんの言葉や姿から誰もが感じたであろう。制度を活用し、資金援助を受ける行為により、地域の手から離れていく、そんなことではなんのための保存・保全かわからなくなってしまう。今後は、地域課題の本質そのもの、すなわち地域の特性がなによりも優先することを国や行政も含めた関係者が認めること、そのうえで、建築基準法をはじめとするさまざまな制度が全国一律ではなく、地域独特の制度として認められることが求められるのではないか。

別の考え方をすれば、京都が特別なのは、重伝建に該当しない数多くの伝統構法にもとづく住まいが再生の対象になっていることかもしれない。そうであれば、逆に重伝建は特別に守られる対象ではなく、地域の特性を活かす仕組みのモデルとして、指定されていない建物や地域の適切なあり方に対して、手がかりのようなものになる必要がある。

「生活が第一」の大内宿では、昼間にぎやかだった各家の商売が16時30分にはおしまいとなる。おかあさんがご飯を作る時間になるからだ。静かな夕暮れに包まれながら「こんなとき、外の床几で仲間と飲みながら議論していると前向きになる」と吉村さんが静かにおっしゃった。ちょうど居合わせた福川裕一 全国町並み保存連盟理事長、まちセンから八女市にもどって活動している中島宏典さんと一緒にしみじみとその言葉をかみしめた。

<丹羽 結花（京町家再生研究会事務局）>





報告◎ 「アートと考古学」展に“京の土壁”を展示する

今年8月末から9月初旬にかけて同志社大を主会場に第8回世界考古学会議京都大会が開催された。アジアで初めて開かれたことを記念して、東山建仁寺両足院では、京町家再生研究会+作事組が招請を受け、「京町家の土壁」を展示する事となった。何故考古学にアートがコラボレーションし、京町家が登場するのか？それはWAC-8 KYOTO実行委員会が育ててきた「考古学をより多くの人々に解放し、現代社会の問題に有益な提言をしてゆく」という理念に基づく企画だったからである。昨年盛夏の頃、サテライト会場の一つ、下木屋町高瀬川沿いの町家を紹介した京町家情報センター会員の若山喜正氏が、実行委員会のコーディネーターを務める安芸早穂子（画家）、P・マシューズ（国立民族博物館教授）両氏を伴い、釜座町町家を訪問された。この時、京町家の歴史、現代における保存再生の意義を説明し、斧屋修復工事のビデオを見て戴くうちに、主題と、土の要素で結ばれる京町家再生運動を世界の人々に紹介してはどうかと、推奨された。当方常々考古学への憧憬を抱いていたが、「アートと考古学」という今日的テーマと、私達の活動の主旨が果たして調和するのだろうか？

年が変わって3月21日、プレイベントとして建仁寺両足院で連続開催されていた多聞会「アートと考古学」シリーズ第5回に参加する機会を戴き、文化博物館の村野正景氏はインカのピラミッド修復と、中国の住居遺跡について話され、私は京町家の生成から地域に生き続ける町家の暮らし、更に改修作法について話した。

その後の対談で、町家の改修には、石や木や土という自然素材を用いて、伝統工法をみにつけた職人達と協働して行うが、遺跡修復の場合はどうか？特に「アートと考古学」でアートを扱うアーティストと遺跡修復の職人との違いはどうか？尋ねた。村野氏の話では、以前アメリカの技師が石と土で出来たピラミッドをコンクリートで固めて修復したが、ある時全て崩壊した、地元の土工や石工が伝統工法でやる様になって、より確かな修復が可能になったという。更に、この土や石を扱う職人の仕事は、広義のアートであり、幸せや喜びを求めて行う人間の基本的な行為だと考えを述べられた。司会を務めていた安芸氏も、考古学の扱う土や木、ガラス片や、ペットボトルを再び現代アートに造形するアーティストと職人は、同列視するという考えを表明され、私自身胸のつかえがおりる思いであった。

「アートと考古学」展のタイトルは、[Garden of Fragments（カケラ達の庭より）]と命名された。広い方丈の広間正面には、素材からカタチへという時間を表わすインスタレーションがある。仏間正面には、日米作家の往復書簡を左に、正面卓上には、真珠湾、広島、長崎、アメリカの原爆実験地、福島の5ヶ所で採取した土を使った書物形状のオブジェが並び、その右側には、5種全ての土を混ぜて焼いた器の中に、現物の土を入れ、鑑賞者はその土に触れてみる仕掛けになっている。あたかも、仏前にて白い光に包まれながら焼香を行い、死者に祈りを捧げるよう！

仏間に向かって左右に作事組が制作した和紙と京土壁の大

パネルが見える。その前には、オランダ人考古学者が日本各地で出土した黒曜石とヒスイのオブジェを並べ、人とモノの昔からの関係をモノに触って考えさせる展示をしていた。

土壁パネルは、一間四方の杉木枠に竹木舞を編み、荒土、中塗土、上塗土を三層に塗る工程を表現しながら、左上に正方形の小窓と、右半分を大きく塗り残し、室内や庭園の光を透かし見る事が出来る。土の存在感と薄壁のしなやかさを、同時に感じることができる。襖溝にはまる木建具の仕掛けを沢辺洋氏が行い、2ヶ月を費して入念な土壁を左官棟梁の萩野哲也氏が製作した。町家の土壁の作法が一目瞭然でわかる事と、建具に納めた薄壁が前後にたわみ、揺れ動く事で、土壁の構造上の役割を鑑賞者に伝えている。奥には、中世末の「年中行事絵巻」と近世の「洛中洛外図屏風」をかけて、町家の変遷を解説する。横には、約20種の左官鑓（こて）道具と京土壁の色見本を展示した。海外からの考古学者達は、鑓の多様さに驚くと共に、5色の美しい京土壁の質感に興味が湧いた様だ。

方丈の左側には、マシューズ氏が東南アジアや環太平洋の国々から集めた、植物を起源とするモノとアートが展示された。植物の心を表現した立体彫刻や床には、安芸氏作の機織図の掛軸が飾られ、東アジアの先史文化と現代アートが共存並置されていた。この方丈からは、広縁、渡り廊下を廻って書院へ、書院から庭を伝って茶室へと向かう事が出来、それらの建物と展示物が桃山時代の美しい庭園に抱かれている。此處を訪れた世界各地から会議に参加した人々と観光客そして京都市民やマスメディアの人達に京の土壁を含めた「アートと考古学」を見られた事後の評をお聞きしたいものである。

＜木下 龍一（京町家再生研究会理事）＞



方丈広間



壁面パネル：町家の描かれた絵巻物

右下：土壁色見本

左下：左官道具の展示



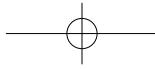
土壁パネル 表面

竹木舞にジュラク土を2層重ね、大阪土を上塗りする



裏面 左官道具と土壁の色見本

青・赤・白・黒 そして中央に黄土を四神相応に配列



歳時記 ○秋に向けて

今年は夏の終わりから雨の多い日が続きました。気候変動が言われておりますが、雨の降り方がずいぶんと変わってきたように感じます。雷や竜巻の注意報も頻繁にだされるようになりました。雨の降り方、風の吹き方でこれまで雨の漏らなかつた屋根でも雨漏りがしたり、浸水の心配も出てきました。雨の続くときにはやはり用心してあちこち見て回ることがやっぱり家の維持には大切になってきます。今年の夏はそんなことを考える日が多かったように思っています。

台風一過の秋晴れが待ち遠しいですね。

秋には「京町家逍遙」を開催する予定でおりましたが、来年3月8日「町家の日」に合わせて開催を検討をしていきたいと思っております。多くの京町家でお住まい、お仕事をされている方々にご協力をいただき、「町家の日」を盛り上げたいと思っております。

情報センターでは今後、全国に呼びかけて「町家の日」の定着を進めたいとの意向です。

これからどのようなことができるか考えていきたいと思っておりますので、友の会のみなさまからいろんな企画やご意見等を頂きたいと考えています。どうぞ積極的なご協力をお願いします。

○秋の見学会

11月20日（日）には杉本家（公益財団法人奈良屋記念杉本家保存会）をおたずねします。杉本家住宅は町家の重要文化財として、またお庭は名称庭園として指定を受けられ、京都市で一番大きな町家として維持、保存されています。

受け継がれた代々の歴史、暮らしを折りに触れご紹介されております。



秋のニワサキ

○茶話会の開催

二ヶ月に一度ぐらい、みんなで集まって茶話会を開きたいと思います。テーマやスピーカーはさまざまに。いろんな話題を取り上げたいと思います。

お茶とお菓子を楽しみながら、町家にまつわるお話をすすめたいと考えています。

○暮らしを大切にしたいということ

いま京町家は普通に暮らすための家だけではなく、お商売の場としての取り上げられることが増えてきました。ご相談の多くが「住まい」ではなく店舗です。最近はゲストハウスとして町家を使いたいという要望が多く、このままでは私たちが大切に思っている「暮らしの継承」が消えてしまうのではないかと心配しています。今回、情報センター事務局として普段から相談対応をされている城さんに昨今の状況といま感じていることを書いていただきました。京都のあちこちで町家がどんどん姿を変えています。町家だけなんだか違うという不思議な景色があります。暮らしが置き去りにされていくと、町家はその個性を失ってしまうと思います。もう一度「京町家」を見直す時が来ているようです。

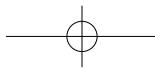
○掘出し物市 報告

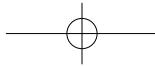
今年はいつもより少し遅い目の8月末の2日間で開催をしました。品物が少し集まりにくいかと思っておりましたが、ほどほどに陳列ができ、いつも通りいろいろな方々にきていただきました。最近は通りがかりの方々ものぞかれることが増えました。京都に観光客が増えていることが実感されます。

＜小島 富佐江（京町家友の会 事務局）＞



掘り出し物市2016





報告○京町家での「暮らし」を軸にして利活用を考えよう

京町家情報センター事務局員として、2011年辺りから活動に参加し、京町家を売りたい・貸したい方、買いたい・借りたい方をつなぐお手伝いをしてきましたが、それに伴って、京町家へのニーズの動向の様々な変化を見てきました。

京町家を活用したカフェ・レストラン、東北震災後には体に優しい素材・暮らしへの関心が一時的に高まり京町家に移住を希望される方、関東や海外の方からセカンドハウスとしての京町家、若い世代に向けた京町家でのシェアハウス、DIY・空き家対策による京都の改修可能な空き町家へのお問い合わせ・・・と社会の情勢と共に京町家への関心も様々な方向から寄せられてきています。

中でも、ここ1・2年の大きな関心が、ゲストハウス・一棟貸しなどの宿泊施設として京町家を活用したいというお問い合わせは、非常に多いです。このところ、京町家情報センターで京町家物件を探しているというお問い合わせの中のほとんどが宿泊施設として活用したいというものです。実際に、京町家を活用した宿泊施設はすごい勢いで増えてきています。これは、海外からの観光客が激増していること・日本全体が観光に力を入れてきていること・2020年の東京オリンピック開催に向けての期待・収益性などが、大きく影響をしていると思われます。

しかし、多くの京町家が宿泊施設として解体されることなく活用される反面、この動きには京町家の保全再生を目的として活動する我々にとっては、喜ばしいことばかりではありません。京町家の建物には、これまで京町家で暮らす中で文化や伝統が蓄積されています。その文化・伝統を感じる宿泊施設として謳っていますが、中に入ると現代の建物と同じように改装されたものもあります。旅行に来た時ぐらい、本物の京町家の暮らしを感じる時間としても良いのではないかとも思います。町内との関わりもどんどんなくなっています。京都の人の気質を作ってきたであろう町内での関わり方や地蔵盆などの文化もなくなっていくことでしょう。

また、もう一つ問題として、宿泊施設としての京町家の活用が色々なところで言われることで、京町家（京都の土地）の価格・賃貸物件であれば家賃がこのところ異常に高くなっています。京都に住む方が、京町家に住めない。京都で京町家を買えない・賃貸物件も居住用で借りることが出来ない状況になっています。京町家に住みたいが、京町家を避けるような考え方をお持ちの方も出てきているように感じます。

京都市もこれから観光と前に出して政策を進めようですが、そこに暮らす人にとっては、暮らしにくい状況を

作ってしまうのではないか心配されます。観光という観点からも考え方の切り口を少し違う見方で進めなければならないのではないかと思います。訪れた町を歩きながら、その土地に住む人々の生活の様子・文化を感じることを一つの大きな目的として観光される方が多いのではないかでしょうか。そこで出会ったそこに住む人のちょっとした関わりで感じた生活・文化が景色となり、思い出となるのではないかでしょうか。このままでは、京町家によって守られている他にないその生活・文化のない京都になってしまうのではないだろうか。京都が京都であるための一番大切なことだと思います。

我々の京町家保全再生の活動も、より一層、京町家に住まいとして住み継いでもらうこと・京町家での暮らし・文化の保全再生について、力を入れていかなければならぬと思います。これからは、畳・床（トコ）さえもない家で生活をしてきたような世代がやってきています。今、皆さんで京町家の本当の価値・文化を伝えて頂かなければ、本當になくなってしまいますよ。これには、今現在、京町家で暮らし、文化を繋いでおられる皆さんが楽しんで発信していくことが大切だと思います。今後ともご協力をお願い致します。

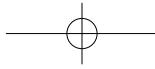
＜城 幸央（京町家情報センター）＞



様々な町家を町歩きしながら巡るツアー「住みたい町家を探しに行こう」

町家の日制定について

京町家情報センターでは、3月8日を「町家の日」と一般社団法人日本記念日協会にて登録し制定させていただきました。日付については、色々と議論の上、「March8」→「マーチヤ」ということで、3月8日に決めました。町家の中に蓄積されてきた暮らしと建物の知恵や工夫を再認識し、町家の伝統的価値とその素晴らしさを多くの人に広め、町家の保全と再生を図ることを目的としています。今後、3月8日は「町家の日」として全国にもお呼びかけて、町家に関わる皆さんに認識してもらい、イベントも開催していきたいと考えております。



町家再生再訪 その4 ◎ 高林邸 (設計施工: 堀工務店) <第二話>

家を直すといつても、素人には見かけのことしかわからないが、専門の大工さんたちには、何がいちばん大事なのかがよくわかっている。土台、構造材の状態と水平が大問題で、ほとんど骨組みだけのようになつた状態で、手間のかかる復元作業が行われた。

門は残したかったが、予想以上に腐食していたため、クリのなぐり丸太だけを残して使うことにして新調した。

門にのしかかっていた樹は大木になるムクノキで、庭師がその種の木をあの場所に植えるはずではなく鳥の糞にまじっていたタネが育ったのだろう、ということだった。チェーンソーでぶつ切りにして切り倒すときは、岩がころがつてくるようで危険だった。

小さい家を再生するだけなのだが、いろんな事が次から次へとあった。

梅雨をやり過ごし真夏に向かう時期に毎日作業が続けられた。京町家作事組が取り組んでいるという看板がおもてに掛けられた。

屋根や外回りの作業の為に鉄の足場が組まれ、近所では、いったいどれほど費用をかけて贅沢な修繕をしているのか、といぶかる人もいた。

低予算の私たちは、先ずは原状回復という作事組の基本方針を見守り、特別なことはお願いしなかった。壁の塗り直しはしなかつた部分もある。

お茶とおやつを用意して毎日現場を訪問した。ときどき作業風景を写真に撮らせてもらつたりしたが、吉田孝次郎さんに言わせると、君は大工さんが一番嫌がることをやってるんやで！とのことだったが。



構造改修



門の解体撤去

子供たちが日常過ごす部屋は畳ではなく板張りにし、床の間と仏壇がセットになつた場所と押し入れも、床の板張りを延長して、少しでも部屋を広く使えるようにした。

ヒノキの床板はそれほど厚いものではないが、府下美山町のヒノキというのがうれしかつた。断熱材はどうしますか、と言わされたが、最初の状態のままにしてみようと思いつかわなかつた。節は埋めてあるが、もし抜け落ちると床下の土が見えることになる。そして床下には常に風がとおつてゐる。

畳と建具が入ると、屋内は見違えるような素晴らしい空間と

なつた。建具の数量は全部で40枚ほどになる。不足していた部分を新調するのは費用もかかるので、どこかの古いものを流用できたらと思っていたら、松野さんがタイミングよく吉報を下さつた。

「京都府画学校の創立者・田能村直入の旧宅「画神堂」が保存かなわず解体されることになった、作業がはじまる前に建具など寸法の合うものがあれば持ち帰ってよいと許可を取つてあるのでごらんになってはどうですか？」



改修後_奥の間



改修後_畳と建具の入った居室

寸法と必要枚数を承知しておられる堀さんと一緒に出かけた。敷地に踏み込んだ時まず目に飛び込んできたのが、我が家家の玄関にほしいと思っていた障子と舞良戸だった。それらは乱暴に打ち捨てられたように玄関の外に散乱していた。

間もなく解体が始まる「画神堂」には、マニアの人も来ていて、襖の取手をはずしたり、バールなどを使って廊下や床の間の一枚板をめくりとつたりしていた。取り外して活かすことで一層値打ちが出るものを打ち捨てておくのはもつたない。そうでなければ単純に産業廃棄物としてゴミになるだけなのだ。

我が家家の玄関は、新調した大きな引き戸と土間、「画神堂」伝来の障子と舞良戸で立派に整つた。土間は、コンクリートにはしなかつた。三和土にしたいとも思ったが、その後、ある人が、玄関が土のままというのは縄文時代の文化が息づいているすごいことだ、と驚いていたこともあって、そのままにしておくことにした。

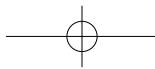
台所側の引き戸は、元々あったものを手直しして使用している。このガラガラという音が、いまや私たち家族の耳の底にしみこんでいる。

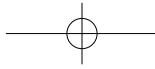
町家といえば、誰もが天井の高い暗い空間を思い浮かべるのではないだろうか。

我が家家の場合は、このトオリニワの高さが1階の屋根の分しかないので、それほど高いものではないが、それでも空間の広がりをいつも感じさせてくれる贅沢な場所だ。風も東西に通り抜けることができる。

以前はこの火袋にベニヤ天井をつけて高さを完全に封じてあつた。

梁というほどのものも何もないに等しい火袋だが、天窓が





2か所にあいていて、光の移動を味わうことができる。次女が叡山電車で幼稚園に通っていた転居間もないころ、お弁当のない日はこの天窓の下の台所でお昼を食べることを好んでいた。

我が家が改修工事が始まってから、無名舎主人で京町家の美をいぶん以前から紹介してこられた吉田孝次郎氏に連絡を取った。

町家という世界に目が開かれつつあった私は、2月に訪問した無名舎見学会でじかに聞いた吉田氏の熱弁が忘れられなかった。

出先から我が家に立ち寄られた吉田氏は、大きなカバンを置くと玄関横に見えていたはしごをいきなり登り切って大屋根に上がられたので驚いた。

その後、妻と一緒に無名舎を訪問した時にいろいろな話を伺ったが、忘れられない名言があった。それは「町家は四隅が見えるように暮らさなあかん」というものだった。

帰り際に、こんなもん使わへんか?といつて、ふすまの取手を分けてくださった。妙なものを頂戴してしまったなあ、とその時は思っていた。のちに画神堂で譲り受けたふすまはどれもこれも取手がはがされていたので、吉田さんに頂戴したままになっていた取手のことを思い出して建具屋さんに預けた。不思議なことに、穴の寸法も不足していた枚数もぴたりと16枚それらが埋めてくれた。

最初にこの家を懐中電灯で見て回ったときは、夜であり、窓を開けて外を見るということをしなかった。2度目に来たとき2階の雨戸をあけて外を眺めて驚いた。大文字山が広々と見えていたのだ。町中の絶景と言つてよかつた。

大文字送り火をこの家から見たい、というのが、工事がはじまったころの希望だった。

ひどい腐食や、手洗いの全面改裝など、おそらく想像以上に手のかかった再生工事だったと思うが、堀さんはぴたりと日程の希望をかなえてくださった。

8月16日。父母と兄弟妹の家族をよんで、まだ転居もしていない、何の家財道具もない出来上がったばかりの家でお披露目をした。

暗くなつてから大文字送り火を2階の座敷から皆で鑑賞した。

〈記・高林素樹〉



2階座敷
ほとんど手をいれずそのままいかされている。
娘さんが受験の年はここに机を置いて勉強に励んだ。



新調された門

(取材後記)

2000年8月に改修工事が完了し、それから5年ほどして近隣にマンションが建ち、いまでは2階座敷の窓からの眺望は失われたが、「私たちにとって大文字の眺めはご褒美でした」と仰った奥様の潔い一言でそのときの感動がよみがえった。娘の瑠璃子さんと葵莉子さんもお手紙をくださった。「障子や襖を開け放つと一つになる、連なつている感じが我が家のがいちばんの特徴。部屋が個室に分かれ、クーラーが完備されている友達の家のよう、自分の部屋がほしい、プライベートな空間がほしいと思ったこともあるが、町家の暮らしで家族の一体感が育まれてきた。木の匂いや畳の匂いが好きになつた。しかし風通しがよく、開放的な分、周辺環境の変化から受けける影響も大きい。せめて今の環境は変わらないでほしい。」と率直な気持ちがつづられていた。

高林さんが空家を購入し、住み継いだ町家で二人の娘を育て、長女の瑠璃子さんは今年就職、次女の葵莉子さんは大学で食文化を学んでいる。そろそろ一つのサイクルが終わろうとしている。町家の生活は子供たちにとってどうだったのか、その答えはこれから15年ほど経つて子供たちが何を思うか、それを聴いてみるとまではわからない。「お父さんに強いられた暮らし」というかもしれない。でも町家は確実に美意識を刺激してくれる。玄関の明かり障子の桟は「猿頬」といって、正面から見たときに横桟が細く見えるよう加工されている。こういう美しい日本の美意識に日々触れることがでけて本当に有り難いと思う。町家は傷んでいてもお金と技術があれば直せるが、そこでどんな暮らしをするかは人それぞれ。吉田孝次郎さんが「四隅が見えるように暮らす」といわれたように、ささやかながら町家という箱に沿つてすっきりと清潔感のある暮らしをしたいと思う。部屋が物で溢れているような住み方では、本来の町家暮らしの良さが活かしにくい。子供たちには本物がわかる人間に育つてほしいと高林さんは未来に願を託した。

京町家ネットがお手伝いをさせていただいた「あけびわ路地」の5軒長屋の再生（京町家通信 第108号を参照されたい）で、北欧デザインの第一人者である島崎先生を入居者としてご紹介してくださったのが関西日本・フィンランド協会事務局次長をつとめる高林さんだ。島崎先生のような発言力のある方が、京都での活動拠点として町家コミュニティで生活し、日本の伝統ある住宅は高齢者にとって住みやすいのかどうかという観点から日本文化を検証されようとしている。町家という箱に沿つた暮らしを営み、さらに住み継いでいくこうとしている高林さんやそういう方々に支えられている私たちにとってこれは意味深いご縁なのだと思っている。

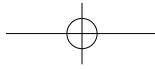
〈取材・京町家作事組事務局 森珠恵〉



玄関 明かり障子



オダイドコロにて
高林さんご夫妻と長女の瑠璃子さん
いちばんくつろげる場所で



interview ——京町家に移り住んで◎木村様邸

二条城から東へ300m、二条通の老舗和菓子屋さんから程近くの路地の中。

大正初期の小さい町家が数件向き合い、その路地には元市電の敷石が並ぶ、まるで映画のシーンにも出てきそうな、落ち着いた風情を感じる路地です。

若い二人がここでの生活を通して、結婚を決め、また新しいスタートを始めようとしていられます。

聞き手：若山正治（若山不動産）

◎住まれるきっかけ等

3年前までは、近くのマンションに住んでいたのですが、狭いと思っていたこともあり、住みにくいと思っておりました。お隣との関係もあまりありませんでした。近隣で住めばと思っていたところ、この町家にたまたま出会いました。実は室内は不動産業に勤務していた為、家に関しては色々と知識や経験はあっただけに、先入観とは反対に、住んでみるとこの家はとても意外性のあるお家でした。

この路地に昔の友人が住んでいたこともあり、より親近感を感じ、懐かしい路地の雰囲気と、町家の魅力に興味をもちました。

◎実際に住んでみての感想はどうでしたか。

町家に住むということに関しては、私は東山に住んでおり、子供ころからの経験がありました。室内は倉敷出身で、京町家には縁がなかったのです。

建物は、しっかりとリフォームされており、トイレもお部屋も、階段も思ったよりもよかったです。2階の部屋は、建物の傾きで、ビー玉が転がります。気になりましたが、家の歴史を肌で感じます。

一番驚いたのは、「隣の声が聞こえること」。はじめは随分気になりました。よく考えると、こちらの音も向こう側に聞こえていることがわかり、お互いマナーが必要だと言うことが身にしみて分かりました。あとは、"ねずみの大運動会"ですかね。室内はまだ苦手です。

◎地域との関係

住んで2年目に町内の組長の当番があたり引受けさせていただきました。町内の活動に積極的に楽しくお手伝いができ、とても良い経験になりました。みなさんと仲良くなりながら、気持ちのいいコミュニティ作りの一部になれたと思っています。

路地の中の皆さんとの普段の「いってらっしゃい、おかえりなさい」の挨拶など、当たり前のように、お互いが心地のよいものです。

一番の思い出は、地蔵盆です。町内の皆さんで準備、本番そしてあしらいまで楽しんで取り組みました。地蔵盆の朝には、鐘をならして町内を歩いて回るんですよ。知らない町内の方とも自然と話す機会があり、良い地蔵盆を作り上げられることができました。お隣の大家さんとはとても関係が良くて、家に遊びに行かせていただくこともあります。

近所には若い人が多く住んでいられ、私たちが住んでからも、新しく入居される方、開業される方もおられ、とてもいい環境と思っております。

◎町家に住んで伝えたいこと

「町家とは建物のことばかり目がいきがちです。それだけでなく、社会と共に存する姿勢がないと、町家での生活は楽しめない」とまさに、気配りの大切さの実体験から力説したいです。

◎これからについて

来年春には実はこの家を離れる予定をしております。とても寂しい気がしています。正直なところ、住み心地は良いのですが、家族が増えるとやはり狭いと感じております。現在、良い経験をしている中で、将来に向けていろいろと準備をしているところです。

木村様 インタビューに答えていただいてありがとうございました。

実はこの町家は、幸せを運んでくる“縁”があるお家のようで、ライフスタイルに応じて皆さん円満に次のステップへ向けて卒業されていくお家です。今回で4組目の新しいご家族。毎回幸せをあやからせていただき、感謝しております。



◎事務局覚え書き

今年度も11月5日（土）には東京相談会を実施します。前回も、盛況で定員を超える申し込みを頂いておりましたが、京町家の宿のブームもあり、京町家を利用した宿泊業を目的とする方がほとんどでした。今回は、居住・職住一体辺りまでの希望者を優先して開催しようと考えています。テーマも「京町家の暮らし」として、エスティート信の井上信行氏に、町家暮らしのイロハを講演していただく予定です。

（京町家情報センター事務局 城 幸央）

オーナー登録数：延222

ユーザー登録数：延1562

物件登録数：延1569

成約件数：延201 (2016年10月1日現在)